

日本英文学会九州支部第 70 回大会

期日 2017 年（平成 29 年）
10 月 21 日（土）・22 日（日）

場所 長崎大学文教キャンパス
(〒852-8521 長崎市文教町 1-14)

日本英文学会九州支部

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8 丁目 19 番 1 号
福岡大学人文学部
山田英二研究室内
TEL (092) 871-6631 (代表)
E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2017-18 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

鶴飼	信光	(九州大学)
大島	由起子	(福岡大学)
大橋	浩	(九州大学)
木下	善貞	(北九州市立大学名誉教授、福岡女学院大学)
小林	潤司	(鹿児島国際大学)
高野	泰志	(九州大学)
高橋	勤	(九州大学)
竹内	勝徳	(鹿児島大学)
鶴田	学	(福岡大学)
登田	龍彦	(熊本大学)
西岡	宣明	(九州大学)
虹林	慶	(熊本県立大学)
早瀬	博範	(佐賀大学)
福田	稔	(宮崎公立大学)
山田	英二	(福岡大学)

2017 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	山田	英二
副支部長・日本英文学会評議員	鶴田	学
『九州英文学研究』編集委員長	早瀬	博範
事務局長	秋好	礼子
書記	福原	俊平
書記	渡部	智也
書記	竹安	大



【JR 長崎駅から】

- ・路面電車 「長崎駅前」 → (赤迫行き) → 「長崎大学前」下車
- ・長崎バス 「長崎駅前」 → (1 番系統「溝川」, 「上床」, 「上横尾」行き等) → 「長崎大学前」下車

【JR 浦上駅から】

- ・路面電車 「浦上駅前」 → (赤迫行き) → 「長崎大学前」下車
- ・長崎バス 「浦上駅前」 → (1 番系統「溝川」, 「上床」, 「上横尾」行き等) → 「長崎大学前」下車

【長崎空港から】

- ・県営バス「長崎空港 4 番のりば」 → (昭和町・浦上経由長崎方面行き) → 「長大東門前 (旧:長大裏門前)」下車

JR 長崎駅及び浦上駅からお越しの場合、路面電車 (1 回 120 円) の利用をお勧めします。路面電車とバスで Suica 等の乗車カードは利用できませんのでご注意ください。

***車でお越しになる方は正門 (国道 206 号線) から入構してください。大学東門からの車の乗り入れはできません。入構される場合、必ず正門守衛所で駐車許可証を発行してもらってください。**

宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。
<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/>

長崎大学 キャンパス・マップ

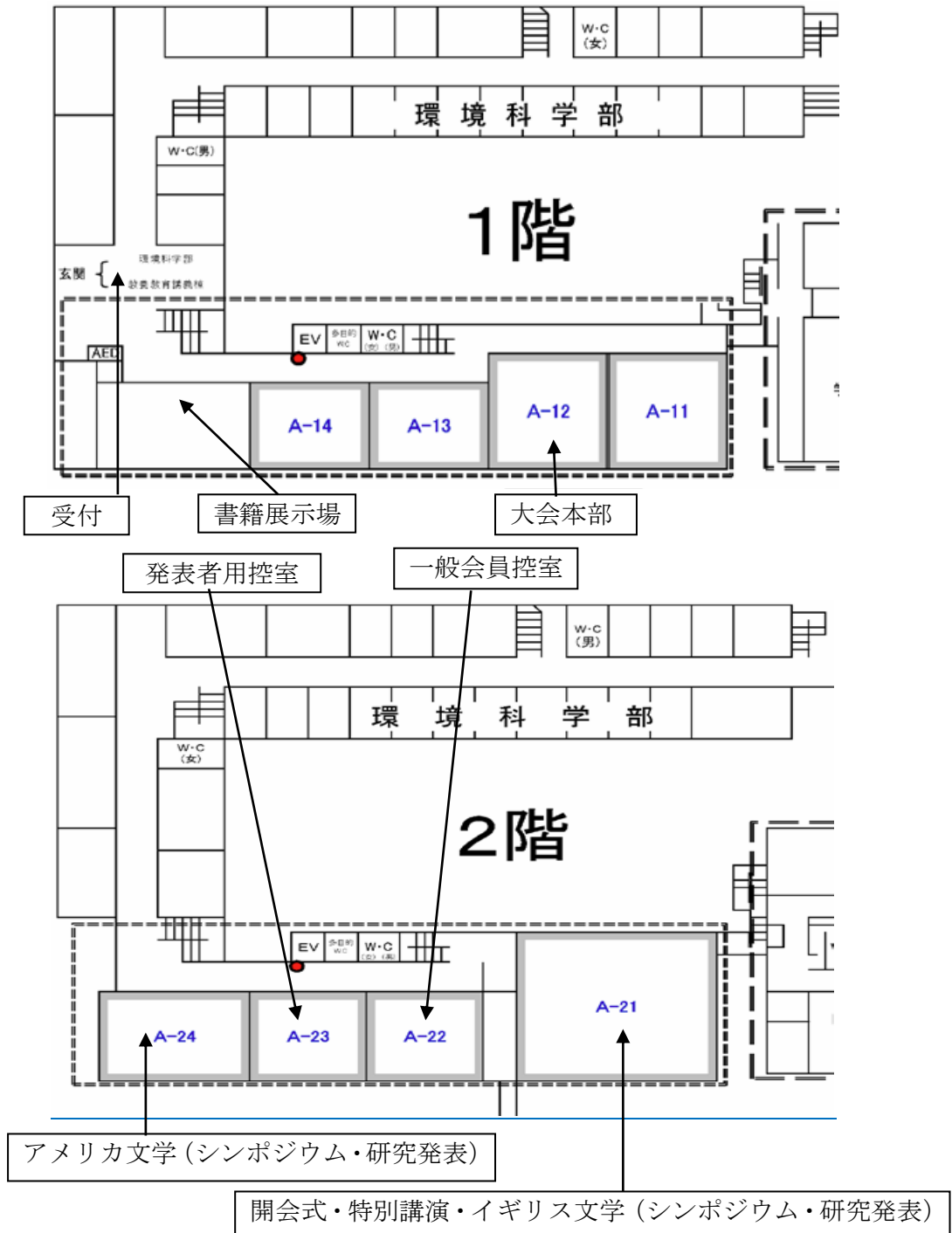


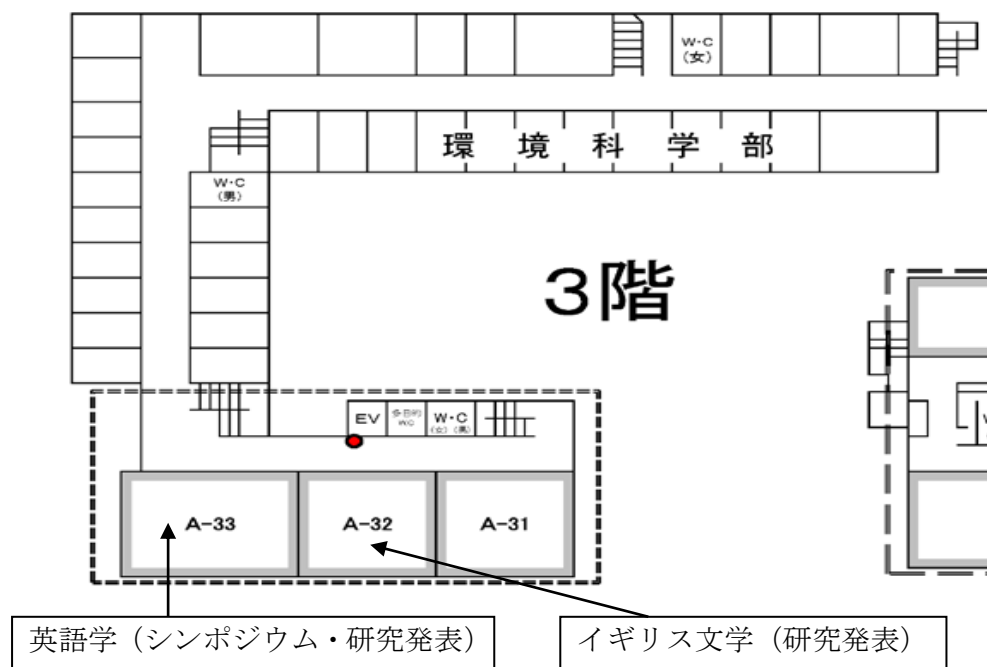
【大会会場】環境科学部南棟（教養教育講義 A 棟）

【懇親会会場】生協食堂 1F

*土曜日は、学内の売店が 14:00 まで、食堂が 13:30 まで営業しております。日曜日は、いずれも営業しておりませんので、昼食をご準備いただくか、弁当をご購入ください。22 日（日）の弁当を事前の予約にてご用意いたします。詳しくは、日本英文学会九州支部 HP (<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/index.html>) をご覧ください。

会場案内
長崎大学 文教キャンパス
(〒852-8521 長崎市文教町 1-14)





大会本部	A12 教室
会議室	環境科学部 1 階大会議室 A
書籍展示場	A 棟 1 階フロアー
開会式・特別講演	A21 教室
シンポジウム	
イギリス文学	A21 教室
アメリカ文学	A24 教室
英語学	A33 教室
研究発表	
イギリス文学	A21 教室
イギリス文学	A32 教室
アメリカ文学	A24 教室
英語学	A33 教室
発表者用控室	A23 教室
一般会員控室	A22 教室
懇親会会場	生協食堂 1F

大会日程

10月21日(土)

開 会 式 (13 時)

A21 教室

研 究 発 表 (①13 時 30 分 ②14 時 10 分)

第 1 室 (イギリス文学)

A21 教室

第 2 室 (英 語 学)

A33 教室

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門 (イギリス文学)

A21 教室

第 2 部門 (アメリカ文学)

A24 教室

第 3 部門 (英 語 学)

A33 教室

懇 親 会 (18 時 30 分～20 時 30 分) (会費 5,000 円 学生 3,000 円)

10月22日(日)

研 究 発 表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第 1 室 (イギリス文学)

A21 教室

第 2 室 (イギリス文学)

A32 教室

第 3 室 (アメリカ文学)

A24 教室

第 4 室 (英 語 学)

A33 教室

特 別 講 演 (14 時 00 分)

A21 教室

閉 会 式 (15 時 30 分)

A21 教室

受付	環境科学部南棟 (教養教育講義 A 棟) 入口
研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室	A23 教室
一般会員控室	A22 教室
書籍展示会場	A 棟 1 階フロアー
大会本部	A12 教室

日本英文学会九州支部第 70 回大会プログラム

日 時：2017 年 10 月 21 日（土）・22 日（日）

場 所：長崎大学

第 1 日 10 月 21 日（土）

（受付は正午より環境科学部南棟（教養教育講義 A 棟）入口にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時 00 分より（A21 教室）

開会の辞	司会・福岡大学教授	鶴田 学
開催校挨拶	支部長・福岡大学教授	山田 英二
開催校案内	長崎大学理事・副学長	星野 由雅
事務局報告	長崎大学教授	廣江 顕
優秀論文賞等選考報告	事務局長・福岡大学准教授	秋好 礼子
	編集委員長・佐賀大学教授	早瀬 博範

研究発表（①13 時 30 分 ②14 時 10 分）

第 1 室（A21 教室）

司会 熊本高等専門学校教授	光永 武志
1. <i>Songs and Sonnets</i> における伝統と革新——Petrarch をヒントに読む身体表象	
熊本県立大学大学院博士後期課程	鳥養 志乃

司会 福岡大学外国語講師	濱 奈々恵
2. ファウルズの『魔術師』における遊戯的模造空間としてのフラクソス島	
北九州市立大学大学院博士後期課程	高本 優妃

第 2 室（A33 教室）

司会 福岡工業大学教授	宗正 佳啓
1. 削除におけるラベルの同一性について	
——Sprouting 分析の問題点とラベリングによるアプローチ	
九州大学大学院修士課程	山本曜一郎

2. 日本語の pro と項削除	
九州工業大学講師	前田 雅子

シンポジウム（15 時～17 時 30 分）

第 1 部門「イギリス文学」（A21 教室）

シェイクスピア劇とその材源・改作に見るイギリスの帝国化の諸相

司会・講師 鹿児島大学教授
講師 鹿児島大学准教授
講師 鹿児島国際大学教授
講師 甲南大学准教授
講師 鹿児島国際大学教授

大和 高行
丹羽 佐紀
山下 孝子
杉浦 裕子
小林 潤司

第 2 部門「アメリカ文学」（A24 教室）

ソローの影響力——生誕二百年記念シンポジウム

司会・講師 九州大学教授
講師 広島大学准教授
講師 九州大学准教授
講師 大東文化大学教授

高橋 勤
城戸 光世
下條 恵子
中垣恒太郎

第 3 部門「英語学」（A33 教室）

フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究

司会 九州大学教授
講師 産業医科大学准教授
講師 九州共立大学講師
講師 産業医科大学助教
講師 九州大学専門研究員

西岡 宣明
田中 公介
大塚 知昇
下飯屋 翔
團迫 雅彦

懇親会（18 時 30 分～20 時 30 分）

場所 長崎大学内「生協食堂」1 階

（会費 5,000 円 学生 3,000 円）

第 2 日 10 月 22 日（日）

（受付は 9 時 20 分より環境科学部南棟（教養教育講義 A 棟）入口にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

研究発表（①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分）

第 1 室（A21 教室）

1. 【発表なし】

2. トールキンとアルクインの神の国

司会 九州共立大学講師 田中 雅子

九州大学大学院博士後期課程 島居 佳江

- 司会 西南学院大学教授 加藤 洋介
3. 『虹』における「不毛」
- 九州大学大学院博士後期課程 田島健太郎

4. テキストを読む行為を贈与論で捉えるアプローチの可能性
——それぞれの論争に共通するもの
- 山口大学教授 宮原 一成
-

- 司会 九州大学名誉教授 太田 一昭
5. 『テンペスト』とファースト・フォリオのジェームズ朝的インターテクスチュアリティ
(招待発表) 九州大学准教授 大島 久雄
-

第2室 (A32 教室)

1. 【発表なし】
-

2. 【発表なし】
-

- 司会 西南学院大学准教授 河原 真也
3. 『嵐が丘』の基調低音としてのアイルランド表象
- 北九州市立大学大学院博士後期課程 梅本 典子
-

- 司会 福岡女学院大学短期大学部准教授 今村 紅子
4. *Bleak House* におけるソーシャルネットワーク的情報収集——19世紀のメタデータ
- 九工業大学非常勤講師 原田 昂
-

- 司会 九州大学教授 鶴飼 信光
5. ヴィクトリア朝イギリス小説における室内装飾表象とデザイン改革
- (招待発表) 西南学院大学教授 三宅 敦子
-

第3室 (A24 教室)

1. 【発表なし】
-

- 司会 近畿大学准教授 青井 格
2. ゆらぎの屋敷——『七破風の屋敷』のロマンス的再構築
- 九州大学大学院修士課程 山口 晋平
-

- 司会 長崎県立大学准教授 山田健太郎
3. Ernest J. Gaines の「アメリカ人」観
——*The Autobiography of Miss Jane Pittman* の “Be Americans” を考える
- 九州大学大学院修士課程 岡部 有紗
-

- 司会 長崎大学教授 鈴木 章能
4. ホームへの帰還——Tim O'Brien のヴェトナム
(招待発表) 西九州大学准教授 渡邊真理子
-

5. 【発表なし】
-

第4室 (A33 教室)

- 司会 長崎大学教授 松元 浩一
1. 助動詞 DO の発達について——エリザベス一世の書簡集に見る助動詞 DO の特徴
福岡女子大学大学院博士課程前期 中尾ロシオ
-

- 司会 九州共立大学准教授 黒木 隆善
2. The Syntax of Subjunctive Conditional Inversion in English
九州大学大学院博士後期課程 高場 清子

3. 主要部終端効果と循環的転送・ラベル付け
沖縄国際大学准教授 前澤 大樹
-

- 司会 熊本県立大学教授 村尾 治彦
4. over coffee とフレーム意味論
九州大学大学院修士課程 石垣 恵一

5. 指示詞の対象指示構造
(招待発表) 福岡大学教授 古賀 恵介
-

特別講演 14 時 00 分より (A21 教室) 司会 佐賀大学教授 早瀬 博範
東京大学大学院教授 後藤 和彦
「アメリカ・南部・文学」

閉会式 15 時 30 分より (A21 教室)
挨拶 長崎大学言語教育研究センター長・教授 稲田 俊明

〈第1日〉10月21日（土）

研 究 発 表

第 1 室 (A21 教室)

司会 熊本高等専門学校教授 光永 武志

1. *Songs and Sonnets* における伝統と革新 ——Petrarch をヒントに読む身体表象

熊本県立大学大学院博士後期課程 鳥養 志乃

John Donne (1572-1631) の *Songs and Sonnets* (1633) には Petrarch を意識して作られたと思われる作品が多く存在している。Donne は Petrarch が描く *disdainful mistress* の「貞節が故に詩人の求愛を受け入れない」という性質を、「不貞であるが故に詩人以外の男の求愛も受け入れてしまう」という性質に変えることで、Petrarch からの伝統を逆手に取りながら恋愛詩を創作している。更に Petrarch 的な恋愛詩では、女性に対する献身で詩人は自身の愛を表現するが、Donne は解剖学への興味を織り交ぜつつ、文字通りの「切断された身体の献身」を表現している。これら身体部位は詩人と恋人の関係を必ずしも良好にするものではなく、しばしば恋人が不貞であることを暴くための道具となっている。本発表では恋人達の関係性を軸に、*Songs and Sonnets* における身体性がどのように Petrarch 的な伝統と向き合っているのかを考察し、Donne の独自性を明らかにしたい。

司会 福岡大学外国語講師 濱 奈々恵

2. ファウルズの『魔術師』における遊戯的模造空間としてのフラクソス島

北九州市立大学大学院博士後期課程 高本 優妃

この発表はジョン・ファウルズの『魔術師』の舞台フラクソス島を現代の遊戯的模造空間すなわちテーマパークと見て、この作品を病としての現代社会批判として読むものである。『魔術師』の主人公ニコラス・アーフはイギリスでの生活に退屈を感じ、新たな刺激を求めてギリシャのフラクソス島へ赴く。この島でコンヒスと名乗る老人と出会い、コンヒスが島全体に創り上げていた彼の劇場世界へと招かれるのである。物語はアーフの現実世界と、現実を特殊化したミニチュア世界（コンヒスの創造した世界）の対照で成り立っている。本発表ではアーフにとってもう一つの世界であるフラクソス島をシミュラクルとして見る。シミュラクルとはジャン・ボードリヤールがオリジナルなきコピーとして述べた世界のことだ。フラクソス島という舞台の上でコンヒスの過去の物語のコピーが演じられていく。この小さなシミュラクル社会を現代のテーマパークと比較しながら考察したい。記号の集合体として存在するテーマパークとの共通項から現代社会の闇を見つめる。

第 2 室 (A33 教室)

司会 福岡工業大学教授 宗正 佳啓

1. 削除におけるラベルの同一性について ——Sprouting 分析の問題点とラベリングによるアプローチ

九州大学大学院修士課程 山本曜一郎

本論では、間接疑問縮約 (Sluicing) の一種である Sprouting の現象を扱う。一般的な間接疑問縮約の場合、something のような先行詞が先行文では用いられるが、そのような先行詞が存在しない場合があり、このような現象は Chung, Ladusaw, and McCloskey (CLM) (1995) 以来、Sprouting と呼ばれている。そして、Sprouting の場合、先行詞が存在する間接疑問縮約と統語的振る舞いが異なる点が 2 点存在する。1 点目は Sprouting では、前置詞随伴が許されないという点である。2 点目は Sprouting では、島の修復が不可能であるという点である。これらの振る舞いの違いに対して、CLM (2011) は LF コピーによる分析を行ったが、現在のミニマリスト・プログラムの枠組みにおける改変禁止条件 (No Tampering Condition) に違反しているという点で、この分析は問題である。この問題に対して、Chomsky (2013) で提案された標示付けアルゴリズムと、ラベルによる同一性を想定し、島の制約を受けること・前置詞残留を許さないことという Sprouting の 2 つの統語的特徴を引き出せることを示す。

2. 日本語の pro と項削除

九州工業大学講師 前田 雅子

本発表では、日本語の空範疇の種類と生起環境に関して考察する。空範疇の種類に関して、Kuroda (1965) は音韻素性を持たない代名詞 (pro) の存在を主張したのに対し、Oku (1998) は項削除を提案した。また、pro を仮定する分析の中でも、topic-bound pro、definite/indefinite pro などが提案されている。このように、現状ではあまりに多くの種類の空範疇が想定されており、それらをいかに統一するかという問題が残されている。もう一つの重要な問題は、そのような空範疇の生起環境に関する制限である。例えば、Huang (1982) は目的語 pro は null topic に束縛されると主張した。Abe (2009) では、項削除は先行詞により c-統御されない環境でのみ可能であると主張している。このような、空範疇の種類と生起条件に対し、本発表では可能な限り統一的に分析することを試みる。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(A21 教室)

シェイクスピア劇とその材源・改作に見るイギリスの帝国化の諸相

司会・講師	鹿児島大学教授	大和 高行
講師	鹿児島大学准教授	丹羽 佐紀
講師	鹿児島国際大学教授	山下 孝子
講師	甲南大学准教授	杉浦 裕子
講師	鹿児島国際大学教授	小林 潤司

本シンポジウムでは、ウィリアム・シェイクスピア劇とその材源および改作を議論の素材にして、近代イギリスがどのような帝国化を経ていったのかということについて考える。シェイクスピア劇はその様々な先行作品の二次創作として成立し、またそれ自体が後代の二次創作の試みを誘発してきたわけだが、この一連の営みはイギリスの帝国化にどのように寄与し、また逆に、イギリス帝国主義がシェイクスピア劇の創作と二次創作にどのような影響を与えたのだろうか。また併せて、材源、シェイクスピア劇および改作のそれぞれの特徴を明らかにしたい。

なお、扱う作品は、『ペリクリーズ』の材源となった中世の詩人ガワーの作品、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』(Titus Andronicus, 1594)、『ヴェニスの人』(The Merchant of Venice, 1598)、『リア王』(King Lear, 1607)、『ペリクリーズ』(Pericles, 1607)、『シンベリーン』(Cymbeline, 1609-10)、ネイハム・テイト (Nahum Tate) の『リア王一代記』(The History of King Lear, 1681)、ジョージ・グランヴィル (George Granville) の『ヴェニスのユダヤ人』(The Jew of Venice, 1701) など多岐にわたる予定である。

ネイハム・テイト作『リア王一代記』とイギリス帝国主義

大和 高行

ネイハム・テイト (Nahum Tate) 作『リア王一代記』(The History of King Lear, 1681) といえば、「原作を台無しにする」という意味の“Tatefication”という造語が19世紀に作られてしまったことで有名な劇である。シェイクスピアの『リア王』の上演に慣れた今日の我々からすれば、コーディリアが秘密裏にエドガーと恋仲にあり、終幕において王冠を戴いて女王となったコーディリアとエドガーの結婚がリア王から許され、そのリア王もグロスターとケントと隠遁して余生を過ごすことが述べられることは奇異な改変にみえるかもしれない。また、道化の不在も大きな変更点である。このようなシェイクスピア版とテイト版との相違については、従来色々と論じられてきた。

他方、コーディリアとエドガーが恋仲にあるという設定にしたために『リア王一代記』で不在となったフランス王や、エピローグで言及される「タンジール」についてはこれまで等閑視されてきた感がある。これらの問題を初演当時の歴史的状況を踏まえつつ、イギリス帝国主義の観点から考察してみたい。すなわち、1678年に起きた教

皇主義者陰謀事件、更には、1678年から1683年にかけて起きた王位継承排除危機（カトリック教徒たる王弟ヨーク公ジェームズを次期王位継承者から排除するという動き）を念頭に置き、また、「タンジール」がイギリスにとって重要な海外拠点であったという事実に鑑みるならば、『リア王一代記』というテキストにイギリス帝国主義が反映されていることがわかるということを証明してみたい。

放浪する英雄と処女性への回帰 ——『ペリクリーズ』とイングランド帝国主義——

丹羽 佐紀

シェイクスピア晩年のロマンス劇に繰り返し見られる死と復活のテーマは、『ペリクリーズ』においてとりわけ処女性の概念と関わっている。ペリクリーズの放浪は、処女性への幻想がグロテスクに打ち碎かれることから始まる。彼の贖いの旅は、セーザとの婚礼と弔い、売春宿におけるマリーナの処女性の危機など、古代の英雄譚を想起させる艱難辛苦を経て、最終的に次世代の正当な婚礼へとたどり着く。その過程は、詩人ガウアーの語りを通して、単なる寓話としてではなくイングランドの観客の意識の過去から未来に直接つながられる。

当時のイングランドにおいてこの劇がたびたび上演されたことから、本発表では、『ペリクリーズ』において、処女性に象徴される純粋さへの止むことのない希求が、自国への観客の帰属意識やアイデンティティの継承と重ね合わされていることを明らかにする。その際、材源とされるタイアのアポロウニアスの物語や、ガウアー及びトウワインの作品は、アイデンティティを表出させる上でどのような効果をもたらしているのかについても考察する。ペリクリーズの放浪と彼がたどり着く世界は、イングランドの対外的な政策を潜在的に支える古（いにしえ）の世界への憧憬を表象し、中世詩人ガウアーはそれと呼び覚ます存在として立ち現れるのである。

“Never was a war did cease (Ere bloody hands were wash’d) with such a peace” ——『シンベリン』における侵害の脅威と回避、身体と国家をめぐる不安——

山下 孝子

『シンベリン』では数々の混乱や問題が錯綜的に生起し、そのそれぞれが大小の危機となって登場人物たちを脅かしては混乱させる。冒頭、イモジェンとポステュマスの自由結婚の権利行使がシンベリン王の父権やブリテンの国家利益と衝突して開幕する。イモジェンの二人の兄は幼少時に行方知れずとなっており、イモジェンの身分違いの結婚によって、ブリテンの安定的王位継承には暗雲が垂れ込めるのである。王妃とクローテンの欲望と陰謀が不穏にくすぶるなか、ヤーキモーによるイモジェンの不貞が捏造され、怒りのポステュマスは妻殺害を敢行しようとする。一方ブリテン国の対外情勢も安泰ではなく、貢物の滞納をめぐるローマとの交渉が決裂して戦争に突入する。このように、劇中では個人の権利が侵害され、ブリテンの自律的国家としての存立も安定しない。さまざまな利害が対立するなか、ブリテンの勝利によって戦乱が終わると、一転、終幕ではすべての混乱が一気に解決するが、シンベリンの終幕の台

詞 “Never was a war did cease / (Ere bloody hands were wash’d) with such a peace” は、消えない不穏さの残余を響かせるように思われる。

本発表では、欲望と権利侵害が登場人物の身体と国家を脅かすさまが『シンベリン』においてどのように表現され、提示されているのか、検証を試みる。

ジョージ・グランヴィル『ヴェニスのコダヤ人』 ——再入国とコダヤ人帰化法のはざまの時期のコダヤ人表象——

杉浦 裕子

ジョージ・グランヴィルの『ヴェニスのコダヤ人』(1701)は、王政復古期の劇場再開以降に初めて『ヴェニスの商人』が舞台に上がった際の改作版であり、1701年の初演から約40年にわたって上演された。『ヴェニスのコダヤ人』のシャイロックは、喜劇役者トマス・ドゲットが演じた事実からもわかるように、守銭奴のカリカチュアとして上から視線で笑われる人物像になっている。

一方で歴史に目を転じてみると、本劇が書かれたのは1656年のコダヤ人再入国と、1753年のコダヤ人帰化法に挟まれた中間の時期に当たる。1741年にチャールズ・マックリンがシェイクスピアの原作に近い『ヴェニスの商人』を復活させ、その戦慄の走るようなシャイロック像が、コダヤ人帰化法をめぐる時期に反コダヤ感情を煽る言説に利用されてきたことは指摘されてきた。しかし、コミック・キャラクターとなり下がったグランヴィルのシャイロックの意義が、17世紀末～18世紀初めという歴史背景の中で論じられることはほとんどない。本発表では、この時期のコダヤ人表象をもう一度整理しながら、グランヴィル版のシャイロック像を分析する。

“Have with my knife carved in Roman letters” ——『タイタス・アンドロニカス』における文字と帝国——

小林 潤司

『タイタス・アンドロニカス』の終盤(5.1)、邪悪な正体を暴かれたエアロンが、これまで犯した数々の悪行をふりかえって、誇らしげに羅列する中に、墓地から掘り出した死体に「ローマン体文字で」不気味なメッセージを彫り付けて遺族宅の門前に立てかけておくというグロテスクないたずらの告白がある。なぜ死体に刻んだ文字は「ゴシック体(黒字体)」でも「イタリック体」でもなく「ローマン体」だったのか? 「はっきりとした字体で麗々しく」という主意は了解できるのだが、古代ローマの碑文の書体を模してデザインされた活字の書体であるローマン体を、ゴート人の女王の情夫であるムーア人が用いるというアナクロニズムに、隠微で苦いアイロニーがこめられてはいないか。文字を書く、読む、そして読ませる。文字によって記録することを通して、記憶や歴史に痕跡を留めるという行為の内に隅なく浸透し作用する権力の働きとふるまいを赤裸々に描いた悲劇として『タイタス』を読み直してみたい。

第2部門「アメリカ文学」(A24 教室)

ソローの影響力 ——生誕二百年記念シンポジウム

司会・講師	九州大学教授	高橋 勤
講師	広島大学准教授	城戸 光世
講師	九州大学准教授	下條 恵子
講師	大東文化大学教授	中垣恒太郎

現代においてソローの思想はますます現実感と重要性を増しつつあるように思われる。20 世紀、そして 21 世紀の今日ソローが読まれつづける背景にはどのような要因があるのだろうか。本シンポジウムではソローが後世の作家に与えた影響力をとおして、ソローの文学の本質について考察する。これまでソローの影響力にかんする議論にはふたつの流れがあったように思われる。ひとつは政治思想の観点から、ソローの非暴力主義が抵抗運動の思想的根拠とみなされたことである。もうひとつの流れは、1970 年代以降、自然保護思想の高まりなかでソローの自然と調和したシンプルライフの理想、あるいは 19 世紀における環境思想の萌芽が注目されたのである。本シンポジウムではこうしたふたつの流れと併行して、ソローの思想、あるいはその個性的な生活の実践が後世の作家の想像力にあたえた影響について考察し、その影響力の分析をとおしてソローの文学性の要因を逆照射してみたい。

身体の思想

高橋 勤

ソローの大きな影響力の背景には現代思想との親和性があるのではないだろうか。そのことはエマソンのたどった宿命と比較すれば、より明白になるのではないだろうか。従来ソローは、「コンコードの哲人」とよばれたエマソンの「弟子」であり垂流と考えられたのだが、その影響力は今日において大きく逆転している。今日ソローが読まれ続ける要因には、政治や環境の言説の背後にある、より哲学的な問題とその傾向に関連していると思われるのである。より具体的にいうと、それは身体をめぐる省察であり、無意識の問題でもあるだろうし、それらの要因を含む文化全般のあり方の考察と言い換えることも可能であろう。西洋における精神と身体、理性と悟性といった二元論、あるいは科学的思考の不毛性を超克しようとする意識がソローにあり、そうした思考の可能性が現代思想の方向性と親和し、ソローが読まれつづける遠因となっているのではないかと考えるのである。

ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア ——Sarah Orne Jewett 作品における自然と人の共生コミュニティ

城戸 光世

19 世紀後半のアメリカでは、特定の場所を取り上げ、その場所に住む人や自然環境をリアリスティックな筆致で生き生きと描写した作家たちが活躍した。これらの作家たちは、文学史上、地方色作家と呼ばれてきたが、Sarah Orne Jewett (1849-1909) もその一人と評されることが多い。メイン州の地方共同体に住む人々や自然環境を、暖かくも鋭い観察眼と優雅な文体で描いた彼女の代表作 *The Country of the Pointed Firs* は、メイン州海岸沿いの小さな村 Dunnet Landing を舞台に、そこを訪れた作家／語り手が遭遇する人々やエピソードがいくつもの章としてゆるやかにまとめられた作品である。彼女の作品にみられる自然の細部への観察とその描写、自然と人が調和する生き方は、ソロー文学との近似性を如実に感じさせる。本発表では、近年再評価の進むジュエットを、ソロー的エコロジカル・コミュニティ思想の継承者として、21 世紀の今再燃している倫理的批評 (ethical criticism) の観点から改めて読み直してみたい。

ソローとオースター：19 世紀アメリカの家政学と保険思想の観点から

下條 恵子

これまで Paul Auster (1947-) の作品にみられる Thoreau の影響については、思索的自己探求という主題で両者を関連付ける批評が中心的であったが、本発表では Auster が描く生活構築・管理の場面に注目し、それを Thoreau の時代に開花した「家政学」および「保険思想」の観点から検討する。*Moon Palace* (1989) や *Music of Chance* (1990) には *Walden* (1854) の “Economy” を彷彿とさせる生活空間構築の描写が登場し、*Brooklyn Follies* (2005) は、想像上の楽園を探求する書物として *Walden* に言及した上で一種の保険制度を利用した共同体構築を模索する。「家政学」と「保険思想」は 19 世紀前半のアメリカで開花した分野であり、どちらとも資本主義が加速するアメリカ社会において「ドメスティックな空間」(家庭空間／海上・海外の対義語としてのアメリカ国内) を理性と知識によって掌握・管理しようとする動きであった。この二つの観点から Thoreau と Auster を再読することにより、両者の新たな関係性を明らかにしてみたい。

文化的アイコンとしてのソロー ——アメリカ精神文化の想像力

中垣恒太郎

コメディ映画『ハロルド&クマー ホワイトキャッスルへ行く』(*Harold & Kumar Go to White Castle*, 2004) では、人種差別主義者である白人警官が諷刺されているのだが、アジア系(韓国系・インド系)の主人公 2 人がこの白人警官の偏見により投獄されると、留置場の先客である黒人男性が黙々と本を読んでいる姿に出くわす場面がある。この本はソローの『市民的不服従』(*Civil Disobedience*, 1849) であり、物語のエピローグにてこの黒人男性が不当逮捕に対して後に訴えを起こす顛末が明かされ

る。物語の本筋には関わらない場面であるのだが、ソローの文化的アイコンがある人物を表現する際に大きな役割をはたしている典型例となっている。大衆文化に脈打つソロー像の変遷を辿ることで、それぞれの時代が求めるアメリカの精神性や理念が浮かび上がってくる。本報告では主にカウンターカルチャー以後の文化的アイコンとしてのソロー像を探る。今日の「トランプ現象」をめぐる文化・政治・社会状況までも貫くアメリカの精神文化の有り様までも展望することができるのではないかな。

第3部門「英語学」(A33 教室)

フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究

司会	九州大学教授	西岡 宣明
講師	産業医科大学准教授	田中 公介
講師	九州共立大学講師	大塚 知昇
講師	産業医科大学助教	下仮屋 翔
講師	九州大学専門研究員	團迫 雅彦

近年の生成文法理論研究で最も注目され、盛んに研究されているのがフェイズ理論と、CP のカートグラフィ分析である。ただ、現在、それぞれ、独自に活発に研究が進められているが、2つの相関を解き明かす試みはほとんどなされていない。特に、「フェイズ (C, v*) がすべての統語操作を駆動する」というフェイズ理論の重要な主張 (Chomsky (2007, 2008)) をCPが (Force, Topic/Focus, Fin等の) 複数の機能範疇の複合体とするカートグラフィ分析に照らして考えた場合、そのうちの何がフェイズの中核となるのかという疑問に対する答えは提示されていない。この答えを探ることにより、中核となる機能範疇の有無に基づき、フェイズとしての完全性が定義され、従来、強フェイズ、弱フェイズと言われてきたものの実質的内容が明らかになり、フェイズ理論、カートグラフィ分析いずれにおいても有意義な帰結がもたらされると考えられる。本シンポジウムでは、以上の観点に基づき、不定詞、動名詞などの非定形節、あるいは幼児の文法が欠如的と考えられることから生じる文法現象や、右方移動の特性の構造的要因を探り、現象の解明とその理論的貢献を示す。

フェイズ CP カートグラフィ分析の妥当性について

田中 公介

Chomsky (2008)で提案されたフェイズ理論では、Cはフェイズ主要部として、CP-TP領域中の派生の中心的役割を担うと仮定された。しかし、この考えではCP領域に複数の談話要素が生起する場合の文法的事実を適切に捉えられない。一方、Rizzi (1997, 2006)におけるCPカートグラフィ分析では、CPは、複数の談話要素を併合可能なForceP、FocusP、TopicP、FinitePという四つの機能投射によって形成されるが、これら四種のうちどれが派生上で中心的な役割を果たしうる(即ち、「フェイズ的」な)投射

であるかは考察が必要となる。

そこで本発表では、フェイズである CP が四種の機能投射に分化するという前提のもとで、ForceP と FiniteP がフェイズ投射として機能する派生分析を提案する。この分析に、近年のミニマリストの枠組みで提案された幾つかの仮定を加味することによって、右枝節点繰り上げ構文や重名詞句転移構文のような右方 A' 併合構文に対する新たな統語派生を提示する。更に、本分析は話題化構文のような左方 A' 併合構文の文法的特徴も説明できることを示す。

カートグラフィの再考察——POP+の観点から

大塚 知昇

生成文法の現在主流の研究方針の一つとして、Rizzi (1997) に代表される、言語の左周辺部の構造を探索し、帰納的、表示的アプローチをとるカートグラフィ研究があげられる。先行研究においてカートグラフィ研究の妥当性が経験的に示されてきた一方で、現在の理論研究の主流である、言語現象に演繹的、派生的にアプローチするフェイズ理論との間には背景的な相違が存在し、両者の融合は困難であった。本発表では、最新理論である POP+ の枠組みでカートグラフィ研究を捉え直し、両研究の融合の可能性を模索する。

具体的には、フェイズ主要部 C の Force と Fin への分離と、C の持つ役割の両者への分業を提案し、この両主要部の相互作用により、カートグラフィ研究で一般的な左周辺部の構造が派生的に導き出せる可能性を示す。更に Free Merger の想定のもと、Force と Fin 主要部を派生に導入する際に Set-Merge だけでなく Pair-Merge が用いられる可能性から、欠如的な不定詞節の構造も導き出せると主張する。

非定形性はどのように生じるか ——フェイズ理論とカートグラフィ分析の観点から

下飯屋 翔

英語の動名詞構文では、間接疑問文・話題化・焦点化などが許されない (Reuland (1983), Hooper and Thompson (1973))。この統語的特徴をカートグラフィ分析に照らすとすれば、関連する要素の着地点が何らかの要因によって利用できないことに帰せられる。

本発表では、英語の動名詞構文に類似した特徴をもつトルコ語の名詞化表現 (Kural (1993)) を参照し、言語の均一性 (Chomsky (2001)) の観点から、当該構文では Force-Finite が一体となる主要部 C (Rizzi (2004)) が統語派生上で不活性化されるため、先の統語現象が生じないと主張する。その際に、近年 Chomsky (2015) の分析のもとで提案されるペア併合操作が鍵となることを論じる。

また、併合操作の可能な組み合わせから得られる外的ペア併合操作 (Otsuka (2017), to appear) により、英語の動名詞構文の交替可能性や、その他の非定形構文の特徴が原理的に捉えられると述べていく。

英語の母語獲得過程における Subject-Verb Agreement の非対称性とその統語分析

團迫 雅彦

本発表では、英語の獲得過程に見られる疑問文と平叙文における Subject-Verb Agreement の非対称性に焦点を当て、フェイズ理論とカートグラフィの観点から統語分析を行う。英語の母語獲得過程において、三人称単数の主語と動詞の形態的一致は (1a,b) のように平叙文では随意的に起こるが、一方で (1c,d) のように疑問文では義務的であることが指摘されている (Guasti and Rizzi 2002)。

- (1) a. He walk.
b. He walks.
c. Does he walk?
d. @Do he walk? (@: not observed)

フェイズ理論では、フェイズ主要部 C から T への ϕ 素性の継承が行われ、T と Probe-Goal の関係になる vP 内の主語との Agree 操作によって ϕ 素性の値が付与されることで、Subject-Verb Agreement が成立する (Chomsky 2008)。上記の言語獲得における非対称性をフェイズ理論で捉えるには、平叙文では T の ϕ 素性の値が付与されなくても収束する派生を、そして疑問文では必ず T の ϕ 素性の値が付与される派生を保証する体系でなければならない。本発表では、疑問文において義務的に一致が起こることに注目し、左側周辺部の CP 領域の活性化によるカートグラフィ分析も射程に入れ、非対称性に対する説明を試みる。

〈第2日〉10月22日(日) 研 究 発 表

第 1 室 (A21 教室)

1. 【発表なし】

司会 九州共立大学講師 田中 雅子

2. トールキンとアルクインの神の国

九州大学大学院博士後期課程 島居 佳江

昨年度の研究発表「トールキンの聖戦」において、トールキンにとって、『ホビット』の戦いは「正戦」(just war) であり、さらに『指輪物語』での戦いは必要な贖宥であ

り、「聖戦」(holy war) だったのではないかと論じた。その戦いに与えられる大義や正当性について考えたとき、中世神学者たちにまでさかのぼることとなった。本発表では、その論点を発展させて、トールキンがどのように聖戦を戦ったかについて、アルクインの神の国ビジョンと比較して考察する。アルクインの理想は非常に明確で、旧約聖書に基づく神の国の建設には、ダビデの王、法王、そして海外への伝道者たちの働きと協力を必要不可欠としていた。キリスト教帝国を建設するために、カール大帝は聖戦を戦った。トールキンの描く世界にも、アルクインが目指した聖戦の形が認められることを検証し、それが、トールキンの神の国建設に重要な手がかかりとなることについて論及する。

司会 西南学院大学教授 加藤 洋介

3. 『虹』における「不毛」

九州大学大学院博士後期課程 田島 健太郎

D. H. ロレンスによる長編小説『虹』では、恋人スクレベンスキーとの破局を経験した主人公アーシュラ・ブラングウェンが女教師ウィニフレッド・インガーと同性愛的な関係に陥る。しかしウィニフレッドがアーシュラに性的なアプローチを試みると、アーシュラは突如この女教師に対して拒絶反応を示すようになり、終いに叔父トムを説得してウィニフレッドと結婚させてしまう。このようなアーシュラの行動はあたかもホモフォビアによるもののようであるが、この拒絶反応はスクレベンスキーが残っていた不毛な性愛へのトラウマと考えられる。本発表では上記のようなアーシュラの行動を、産業化が齎す靈魂の退廃、そうした時代における不毛な性愛といった、『虹』におけるより中心的なテーマと関連付けて説明することを試みる。

4. テクストを読む行為を贈与論で捉えるアプローチの可能性 ——それぞれの論争に共通するもの

山口大学教授 宮原 一成

本発表は、テクストを読むという行為を贈与論の枠組みで捉える研究の一環として、読む行為に関する議論の 1970～90 年代の展開と、贈与論に関する同時期の論争の推移とのあいだに、興味深い並行関係があることを指摘するものである。

マルセル・モースの贈与論は、贈与には〈与える〉〈受けとる〉〈お返しをする〉という 3 つの義務があることを解き明かし、そのうちの〈お返しをする義務〉の原動力は、贈与品に込められる贈り主の〈念〉が、その者のもとへ戻りたがる性質をもつことにある、と説明した。テクストの意味内容が書き手から読み手へ伝わることをモース的贈与と見なし、そしてこの〈念〉をテクストの〈作者の意図〉になぞらえることができるなら、モース流贈与論がデリダらの論難を受けたという展開は、〈作者の意図〉の権威が受容美学や読者反応理論によって否定された展開と、同じ軌道を辿っていたのだと見なす視点が得られよう。本発表ではその視点がもたらす可能性を探ってみたい。

5. 『テンペスト』とファースト・フォリオの ジェームズ朝的インターテクスチュアリティ

九州大学准教授 大島 久雄

ファースト・フォリオの巻頭を飾る『テンペスト』がその名誉ある位置を得た理由は何だったのだろうか。最後のシェイクスピア単独執筆作品で、宮廷・劇場上演の記憶も新しく、台本等もほぼ完全な形で残っていたという理由がまず考えられるが、エピローグは劇作家本人の劇界訣別の辞とも解釈できるので、巻頭を飾るのにこれ程条件がそろった劇はなかったかもしれない。作品掲載順等も含めてファースト・フォリオ成立に関しては書誌学的研究が先行してきたが、本論は、巻頭配置の問題を起点として、『テンペスト』とファースト・フォリオのインターテクスチュアリティに注目し、学者王ジェームズを中心とする当時の政治的関心を劇作に反映させた晩年のジェームズ朝宮廷劇作家シェイクスピアの姿を明らかにしようとするものである。

第 2 室 (A32 教室)

1. 【発表なし】
2. 【発表なし】

司会 西南学院大学准教授 河原 真也

3. 『嵐が丘』の基調低音としてのアイルランド表象

北九州市立大学大学院博士後期課程 梅本 典子

『嵐が丘』のアイルランド的背景についての最初の本格的な考察は 1893 年で、William Wright による。以後具体的な研究が深められ、Terry Eagleton はヒースクリフとアイルランドのジャガイモ飢饉を結びつけ、作品全体に漂う「怨念」にイギリス植民地主義の影を見ている。本発表では、まず『嵐が丘』が 1801 年という具体的な年号から始まることに注目したい。これはアイルランドがイギリスに併合され国を失った年であり、エミリー・ブロンテの父パトリックがアイルランドを離れてリバプールへ向かったのはその翌年である。イギリスへ着いたパトリックは、アイルランドの名前ブロンティーを捨て、ブロンテを名乗った。このようなブロンテ家の歴史的背景をふまえて、本発表では、『嵐が丘』に漂う基調低音としてのアイルランド表象を考察する。それは一方でリバプールから拾われてきた「黒い子供」ヒースクリフにかけられた呪いとして表され、もう一方でアイルランドの風景に酷似した嵐が丘の原野の下に眠るケルト的要素として表される。

4. *Bleak House* におけるソーシャルネットワーク的信息収集 ——19 世紀のメタデータ

九州工業大学非常勤講師 原田 昂

本発表は、Charles Dickens による長編小説 *Bleak House* において、現代の SNS にも通じるような情報収集とメタデータ利用が用いられている点を分析し、Dickens の情報に対する意識を読み解くものである。本作品は、大法官裁判所 (the Court of Chancery) を批判することが 1 つのテーマとなっている。この裁判所は、時間と費用はかかるが、何も解決されない場所として描かれる。一方裁判所の外では、弁護士 Tulkinghorn と警部 Bucket によって、次々に個人の秘密が暴かれ、謎が解明される。この 2 人はともに、事件を解決するにあたって情報収集を行う。しかも、2 人の手法はメタデータを利用した情報収集だ。情報を説明する情報は、人や情報が集中した 19 世紀英国において重要性を増した。本作品は、単純に裁判所制度を批判するだけでなく、現在にも続く最先端の情報利用を描くものである。

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

5. ヴィクトリア朝イギリス小説における室内装飾表象とデザイン改革

西南学院大学教授 三宅 敦子

家庭を神聖化していたヴィクトリア朝イギリスの小説には、室内の表象が多い。本研究発表では、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・ギッシング、そして H. G. ウェルズの小説に見られる家具の表象に着目し、ヴィクトリア朝イギリスの一大イベントであったロンドン万国博覧会 (1851) を、明確な出発点として始まったデザイン改革との関連性を探る。

20 世紀の社会学者アーヴィング・ゴフマンは、西洋社会では他者に与える印象をコントロールしようとパフォーマンスすることがあり、その際に家や家具をはじめとする室内装飾が舞台装置として機能すると指摘する。本研究ではミドル・クラスの人々が、イギリス社会の支配者としての地位を確実なものとしていく過程において、ヘンリー・コール主導のデザイン改革によって室内装飾への関心を高め、その関心をミドル・クラスという一つの複雑な階級に属する者としてのアイデンティティの確立へとつなげていったさまを、上述の小説家たちの表象を通時的に分析し探りたい。

第 3 室 (A24 教室)

1. 【発表なし】

司会 近畿大学准教授 青井 格

2. ゆらぎの屋敷

——『七破風の屋敷』のロマンス的再構築

九州大学大学院修士課程 山口 晋平

Nathaniel Hawthorne による *The House of the Seven Gables* (1851) はピンチョン一族に受け継がれゆく七つの破風を持った屋敷を中心にそこに住む人物たちの葛藤や心情が描かれた物語である。Hawthorne はセイラムに実際にある七破風の屋敷に着想を得てこの物語を作り上げた。彼は序文として有名なロマンス論を捧げており、そこにあるようにロマンス作家の権利である「自由裁量」を用いて実在する屋敷を物語の中に再構築した。故に彼がどのようなまなざしを以てこの屋敷を建築したのか、ロマンス作家としてどのような意義を込めたのか考える必要がある。

この作品には罪から逃れられないというジレンマや、Hawthorne の芸術家と商業作家の間で揺れ動く様子が見え隠れする。それら葛藤とゆらぎを内包し、象徴するものとして七破風の屋敷は構築されるのだ。この屋敷自体多くのゆらぎを含んでおり、ゆらぎの象徴として読むことができる。作家 Hawthorne はそれらゆらぎを屋敷に込めて、実在する屋敷を物語の中にゆらぎの屋敷として再構築したのだ。

司会 長崎県立大学准教授 山田健太郎

3. Ernest J. Gaines の「アメリカ人」観

——*The Autobiography of Miss Jane Pittman* の“Be Americans”を考える

九州大学大学院修士課程 岡部 有紗

Ernest J. Gaines の *The Autobiography of Miss Jane Pittman* (1971) を通して、黒人の視点から見た「アメリカ人」とは何かを明らかにする。この作品は教科書に載っている史実ではなく、一人の人間が経験してきたことを通して歴史を知り、それを生徒に教えたいという理由で歴史教師が 110 歳の黒人女性にインタビューし、それを編集したものという体裁で書かれ、当時の黒人達の生活や Jane の人生が描かれている。

Gaines の考える「アメリカ人」とは、黒人や白人といった人種の垣根を越えた存在であり、作中で作者が *nigger* という概念と「アメリカ人」の概念を提示することで、黒人にとって「アメリカ人」という概念が新しいことや白人が主張する「アメリカ人」と意味が異なることを主張している。本発表では、Jane の弟や息子のような存在である Ned が白人の支配下にある黒人達に説教する場面で告げる“Be Americans”という台詞を中心に、白人が作り出したイメージとは異なる黒人視点で捉えた Gaines の「アメリカ人」観を考察していく。

4. ホームへの帰還 ——Tim O'Brien のヴェトナム

西九州大学准教授 渡邊真理子

作者による過剰な自伝的身振り、そしてポストモダン文学の流れを汲む“happening-truth” 対 “story-truth” という修辞学上の戦略に貫かれた *The Things They Carried* (1990) は、それまで帰還兵の回想記が主流であったアメリカのヴェトナム戦争文学を塗り替えた小説として現在まで読み継がれており、先行研究では「言語を絶する戦争体験を物語はいかにして語ることができるか」という大きな問題に焦点が置かれてきた。本発表では視点をよりローカルな細部に移すことで、アメリカの戦争小説では戦場との分断の感覚が強調されることが多い「ホーム」の概念について考察してみたい。小説という形式がもつ故郷喪失の感覚、勇敢と臆病をめぐる心理的葛藤、共同体と自我、語りのホームたる戦場への絶え間ない帰還という逆説的構造など、O'Brien の作品群において丁寧に描かれてきたホームの問題は、その戦争小説の基底をなすものとしてもっと語られなければならないだろう。

5. 【発表なし】

第 4 室 (A33 教室)

司会 長崎大学教授 松元 浩一

1. 助動詞 DO の発達について ——エリザベス一世の書簡集に見る助動詞 DO の特徴

福岡女子大学大学院博士前期課程 中尾ロシオ

本研究ではエリザベス一世の言語に焦点をあて助動詞 DO について考察する。彼女が生きた時代は平叙文（肯定・否定）・疑問文（肯定・否定）・命令文に関して、助動詞 DO の使用をめぐり大きな変動があった時代である。彼女のおよそ七十年の長い生涯で書かれた書簡集は助動詞 DO の発達の歴史に関する調査において、個人の言語使用も含め有益な資料になると考えられる。

例えば、即位前の手紙 (1533-1558) ではほとんど用いられていなかった否定表現「DO not + 動詞」は晩年にかけて用例が増加し、使用状況に変化がみられる。

さらに、彼女が肯定文の中で DO を意図的に使用していたことは明らかで、特定の人物（即位前の E. シーモア、即位後のジェームズ 6 世）に対する手紙の中で肯定平叙文における DO が頻出する。

本発表では、いつごろから、いかなる意図をもって DO を用いたのか、どのような動詞が DO と共起する傾向にあったのかなど、彼女の DO に対する使用状況の実態をみていく。

2. The Syntax of Subjunctive Conditional Inversion in English

九州大学大学院博士後期課程 高場 清子

While English allows inversion in subjunctive conditionals with a copula or auxiliary when *if* does not occur as in (1a-c), it does not allow inversion in subjunctive conditionals without a copula or auxiliary as in (1d):

- (1) a. Were he to improve his manners, we might invite him for dinner.
- b. Had John eaten the calamari, he might be better now.
- c. Should you wish to do so, please tell me before I leave.
- d. *Had I her phone number, I could call her. (Iatridou and Embick (1994))

Additionally, the movement of contracted negation to C in (2a) and appearance of *do*-support in the position into which auxiliaries can move in (2b) are incompatible with subjunctive conditional inversion in English.

- (2) a. *Hadn't he seen the car coming, he would have been killed.
 - b. *Did he know that Mary is sick, he would take her to the hospital.
- (Iatridou and Embick (1994))

In this talk, I attempt to explicate the mechanism of T-to-C movement in subjunctive conditionals based on CP cartography and feature-checking and account for the differences between subjunctive inversions and simple questions.

3. 主要部終端効果と循環的転送・ラベル付け

沖縄国際大学准教授 前澤 大樹

本発表の主な目的は、名詞前位形容詞が主要部に後続する要素を持つことができないという主要部終端効果 (Head Final Effect, HFE) に対し、現行の理論的仮定の下で原理的説明を与えることである。

HFE に原理的説明を与え得る Abney (1987) の洞察に基づきつつ、本発表では形容詞と主要部名詞との関係が通常の述語・項関係と同じように確立されると主張し、この際問題となる選択の問題に対して、ラベル付け算法に基づく解決を図る。即ち、DP 内上位の主要部による選択に際しては、最小探索は SO のラベルとして [+N, -V] を持つ最も“浅い”項目を検出すると提案し、形容詞の投射が割り込んだ構造に於ける選択特性の充足を保証する。

また、線形語順の導出に関しては、循環的転送を厳密に考慮した上で、Num から n への接辞移動の必要性が nP 位相内部の線形化を遅延し、結果として形容詞が非能格的か否かを問わず、補部を伴わない場合には主要部名詞に先行し、伴う場合には後続する語順が得られ、HFE が導かれることを示す。

4. over coffee とフレーム意味論

九州大学大学院修士課程 石垣 恵一

英語前置詞 over による従事用法の研究は Brugman (1988) では時間用法として扱われている。しかし、over coffee を「コーヒーを飲みながら」と訳することができることに對し、同じ時間用法であっても over Christmas を「クリスマスをしなげら」とは訳することはできない。このことから Brugman (1988) での分析を一步推し進めるべく、本論ではフレーム意味論の観点から“*We talked over X*”の制限について考察をする。

「～ながら」とはその動作をするのと同時に他の動作を行う意であることと、従事用法は時間用法と密接な関係にあることから、従事用法を成立させる必須フレームは「行為と時間の経過」であると定義できる。*We talked over coffee.* の場合、コーヒーを飲んで時間を過ごす行為が想定できるため従事用法として容認される。しかし **We talked over water.* の場合、ただ水を飲み時間を過ごすことが非日常的であるため従事用法として容認されない。このように、行為と時間の経過が従事用法を成立させるための必須フレームであると確認できる。

5. 指示詞の対象指示構造

福岡大学教授 古賀 恵介

指示詞 (e.g. *this/that*, コレ・ソレ・アレ) は、通常の名詞句と異なり、対象となる事物の類認識を伴わずに、空間的距離概念のみを用いて個別の対象物を指示することができる。直接指さしをするわけでもないのに、それと同じ効果を言語的に実現しているわけである。本発表では、このような指示詞の特殊な対象指示構造の背後にあるしくみを言語進化的に探り、その諸用法のあり方の全体像を一般的な観点から説明しようとする試みである。

具体的には、名詞句の対象指示構造の持つ本質的 2 機能 (指し示しと描写) の言語進化的成立過程を説明した上で、「指示詞は指し示し機能のみが独立化したものである」との主張をベースにして、指示詞の現場指示用法と文脈指示用法の発達の必然性、また、そこから文法化プロセスを経て獲得されていく拡張用法の多様性を、英語・日本語はもちろんのこと、それ以外の言語のデータも含めて論じていく予定である。

特 別 講 演 (A21 教室)

司会 佐賀大学教授 早瀬 博範

演題 アメリカ・南部・文学

講師 東京大学大学院教授 後藤 和彦 (ごとう かずひこ)

講演内容

アメリカ創生以来、異端の歷程をたどった南部とその文学についてお話ししたい。南部の文学がもつ独自性のよってきたところは、従来、この土地をこの土地たらしめた歴史的風土をめぐってさまざまな観点から探究されてきたのだが、それらを今一度「敗北と文学」という一線から概観し、たとえば私という日本人がこの文学にいれあげてきた偶然が、聴衆の方々の耳に必然の色合いさえ帯びて聞こえてくるようであれば、もって僥倖とすべきところか。

講師紹介

1961 年福岡市生まれ、1983 年九州大学文学部卒業、1988 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京女子大学文理学部 (1988～97 年)、立教大学文学部 (1997～2017 年) を経て現職。

単著に『迷走の果てのトム・ソーヤー——小説家マーク・トウェインの軌跡』(松柏社、2000 年)、『敗北と文学——アメリカ南部と近代日本』(松柏社、2005 年)、編著に『文学の基礎レッスン (立教大学文学部叢書 2)』(春風社、2006 年)、共編著に『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』(松柏社、2013 年)、近年の論文には“Post-War Japanese Novelists and American Literature” (Oxford Research Encyclopedia of Literature [Web], May 2017)、「英文学と日本文学——日本人アメリカ文学者のアポロギア」(日本英文学会関東支部編『教室の英文学』所収、研究社、2017 年 5 月)、「家・父・伝説——フォークナーの『土にまみれた旗』と島崎藤村の『家』」(『フォークナー』第 17 号、2015 年 4 月)、「沈黙のバルキントン」(千石英世編『白鯨——もっと知りたい名作の世界⑩』所収、ミネルヴァ書房、2014 年 12 月)、「破戒としての文学——島崎藤村小論」(藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編『抵抗することば——暴力と文学的想像力』所収、南雲堂、2014 年 7 月)、「南北戦争期におけるマーク・トウェインのふるまい」(『マーク・トウェイン——研究と批評』第 13 号、南雲堂、2014 年 4 月) などがある。